

学位論文題名

日本語母語の大学生における英単語の音読方略

学位論文内容の要旨

本論文は、日本語を母語とする一般的大学生の英単語の読みにおける文字音韻変換(grapho-phonological recoding)の特性を明らかにしようとしたものである。外国語として英語を学習する日本語母語話者の多くがリーディングで示す困難さの1つに、類似した英語の綴りを別な単語として読み分けることができないということがある。英語教育の実践の場においては、この困難さにどのように対処するべきかという問題意識が存在する。そして、認知心理学的観点からは、この困難さには、綴りの形態的類似性のみならず、綴りの音韻的符号化の不適切さが関与しているであろうことが推測される。本論文は、以上のような問題意識を背景にもちながら、日本語母語の大学生が英単語を音読する時の、文字音韻変換の一般的特性を明確にすること、および、その特性の形成にかかわる要因を考察することを試みたものである。

本論文は、7章から構成されている。

第1章「序論」では、英単語の文字音韻変換を論ずる上での基本概念を概説している。まず、英語の表記体系の特性として、文字音韻対応における二つの規則性(則性と定性)を説明し、次に、英語の視覚的単語認知の方法として、文字音韻対応の則性に基づいた書記素・音素対応関係(Grapheme-Phoneme Correspondence)を使用する方法(GPC変換)と、定性に基づいたボディ・ライム対応関係(Body-Rime Correspondence)を使用する方法(BRC変換)とを詳しく説明している。

第2章では、英単語の文字音韻変換の方法についての知見を、英語の文字音韻構造に関する先行研究と、英語母語話者の英単語の文字音韻変換方法に関する先行研究の成果を通して展望し、本論文の問題と目的を提示している。

第3章から第6章では、著者が行った4種類の実験研究を報告している。まず、第3章「英語の習熟度の異なる日本語母語成人の英単語音読における綴りから発音への変換の特徴」(実験1)では、則性が2通りに異なる刺激材料と英語の習熟度が異なる3群の参加者(高習熟度群、中習熟度群、低習熟度群)を用いた音読実験の正答率と誤答分析を通して、日本語母語成人の英単語の文字音韻変換の傾向を調べている。そして、その結果から、GPC変換の使用は、中習熟度群と高習熟度群で高く、BRC変換の使用は高習熟度群のみで高いこと、一方、低習熟度群ではCV分割変換の使用を特に示すことを確認している。また、誤答の分析からは、日本語母語話者におけるGPC変換の誤用(GPC正則変換の過剰適用)とCV分割変換の多用を見出している。これらの結果を総合的に考察し、著者は、日本語母語話者の音読には、CV分割変換の使用が基盤としてあること、さらには、英語習熟度が高い場合であっても、BRCの習得の不十分さからくるGPC正則変換の過剰適用がある

ことを確認している。

第4章「日本語母語大学生の英単語音読における綴りから発音への変換の特徴」(実験2)では、則性と定性がそれぞれ2通りに異なる刺激材料と1群の日本語母語の大学生を用いた音読実験について報告している。すなわち、その実験の音読の正答率と、GPC変換とBRC変換による反応率と正答潜時、さらには誤答についてそれぞれ分析し、そこから一般的な日本語母語大学生の英単語の文字音韻変換の方法を把握することを試みている。その結果は、一般的な日本語母語大学生の英単語音読の正答潜時が、英語母語の低学年小学生と同程度であり、その正答率は、英語の基礎学習でGPCを習得し終えた英語母語の小学生とほぼ同程度であることを示した。また、誤答の分析からは、日本語母語の一般的大学生が使用する文字音韻変換の方略には、GPC変換やBRC変換とともに、CV分割が誤答の主な原因となっていることを明らかにしている。そして、刺激材料によっては、CV分割が正答反応へ一役買っている可能性を指摘し、CV分割変換は日本語母語の大学生の英単語音読に負の効果を与えると同時に、正の効果も与えている可能性について考察している。

第5章「日本語母語大学生の英語の書記素から音素への変換の特徴」(実験3)では、英語の26個の単字の書記素と29個の連字(digraph)の書記素の刺激材料と、実験2の日本語母語大学生を用い、音読の正答率と正答潜時および誤答の分析を通して、英単語の文字音韻変換の基本となる、アルファベットの個々の文字(あるいは文字群)に対する音韻への変換の特徴を把握しようと試みている。その結果からは、いずれの刺激材料に対しても、母音書記素は子音書記素よりも正答率が低いこと、また、連字の書記素と単字の書記素を比べると、母音でも子音でも連字の書記素は、正答率は低いが、正答潜時が短いこと(これは英語母語話者の結果のパターンとは逆である)を見出している。その上で、母音書記素を音素へ変換する方法、特に二重母音を表す書記素を音韻へ変換する方法が英語母語話者のそれと大きく異なることを指摘している。

第6章「日本語母語大学生の英単語認知にかかわる文字音韻単位」(実験4)では、実験2および実験3と同じ日本語母語大学生を対象とし、様々な長さ(文字数)の刺激材料の音素数を聞き分け、その音素に綴りの文字を対応させる単位の取り方から、GPC変換とBRC変換とCV分割の使用を確かめ、さらには、子音書記素と母音書記素の処理の方法を推定しようと試みている。結果の分析からは、日本語母語の一般的大学生の英単語の文字音韻変換の方法には、英語の音節の定性に則ったオンセット(C)とライム(VC)の境界を利用したBRC変換よりも、オンセットとライムの境界を無視したCV単位での変換が多用されていることを明らかにしている。また、英単語の音節の母音と子音との関係の規則性を十分に習得していないことが、文字音韻変換においてCV分割変換を多用する原因となっている可能性を指摘している。

第7章「総合的考察」では、日本語母語の一般的大学生の英単語の音読方略に、GPC変換とBRC変換の英語の文字音韻対応関係に則った音読方略と、CV分割変換などの英語本来の音韻対応関係に基づかない音読方略が混在していることを指摘し、その音読方略の特徴を以下の3点にまとめている。1) 一般に、英語の音節の文字音韻の対応は、子音ではほぼ一対一であるのに対し、母音では一対多である。日本語母語の一般的大学生では、まず、この、隣接する子音によって決まる母音のGPCの習得が不十分であり、その不十分さのために、CV分割、つまりは子音と母音を単位化(群化)することによって文字音韻の変換を行うことが多い。2) 日本語母語の一般的大学生の英単語の文字音韻変換方略は、上記1)

で触れた母音書記素と子音書記素を群化する方法、および、連字の書記素を音素へ変換する方法、特に母音のそれを音素に変換する方法のそれぞれをどの程度習得するかによって、変化する。3) 英語の文字音韻の対応を習得する過程で、CV 分割は日本語母語話者の英単語の文字音韻変換に正と負の両方の効果を与える。英語がかなりの習熟レベルになっても、CV 分割変換の使用は残る。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 阿 部 純 一

副 査 准教授 川 端 康 弘

副 査 教 授 高 橋 英 光

学 位 論 文 題 名

日本語母語の大学生における英単語の音読方略

本論文は、日本語を母語とする一般的大学生の英単語の読みにおける文字音韻変換 (grapho-phonological recoding) の特性を明らかにしようとしたものである。外国語として英語を学習する日本語母語話者の多くがリーディングで示す困難さの1つに、類似した英語の綴りを別な単語として読み分けることができないということがある。英語教育の実践の場においては、この困難さにどのように対処すべきかという問題意識が存在する。そして、認知心理学的観点からは、この困難さには、綴りの形態的類似性のみならず、綴りの音韻的符号化の不適切さが関与しているであろうことが推測される。本論文は、以上のような問題意識を背景にもちながら、日本語母語の大学生が英単語を音読する時の、文字音韻変換の一般的特性を明確にすること、および、その特性の形成にかかわる要因を考察することを試みたものである。

本論文は、7章から構成されている。

第1章「序論」では、英単語の文字音韻変換を論ずる上での基本概念を概説している。第2章では、英語母語話者の英単語の文字音韻変換方法に関する先行研究の成果を通して展望し、本論文の問題と目的を提示している。第3章から第6章では、著者が行った4種類の実験研究を報告している。

まず、第3章では、則性が2通りに異なる刺激材料と英語の習熟度が異なる3群の参加者を用いた音読実験の正答率と誤答の分析を通して、日本語母語成人の英単語の文字音韻変換の傾向を調べている。その結果から、日本語母語話者の音読には、CV分割変換の使用が基盤としてあることを確認している。

第4章では、則性と定性がそれぞれ2通りに異なる刺激材料と1群の参加者を用いた音読実験の、正答率とGPC変換とBRC変換による反応率と正答潜時、さらには誤答分析を通して、一般的な日本語母語大学生の英単語の文字音韻変換の方法を把握することを試みている。その結果から、CV分割が誤答反応を引き起こすだけでなく、正答反応へ一役買っている可能性を指摘している。

第5章では、英語のアルファベット文字（あるいは文字群）に対する音韻への変換の特徴を把握しようと試みている。そして、その結果から、日本語母語大学生の母音書記素を音素へ変換する方法、特に二重母音を表す書記素を音韻へ変換する方法が、英語母語話者のそれと大きく異なることを指摘している。

第6章では、英単語の発音を聞き、音素の数を聞き分け、その音素に対応させて綴りを分割する課題を用いた実験を報告している。そして、その結果から、英語の音節の母音と子音との関係の規則性を十分に習得していないことが、CV 分割変換の原因となっている可能性を指摘している。

第7章「総合的考察」では、日本語母語の一般的大学生の英単語の音読方略における、英語の文字音韻対応関係に則った音読方法と、英語本来の音韻対応関係に基づかない音読方法の混在について考察している。

本論文の研究成果は、大きく以下の3点において認めることができる。1) 日本語母語話者の音読には、CV 分割変換の使用が基盤としてあること、さらには、英語習熟度が高い場合であっても、BRC の習得の不十分さからくる GPC 正則変換の過剰適用があること、を確認した。2) 日本語母語話者の英単語の音読方略が英語の習熟度によってどのように変化するかには、母音の GPC の習得、および、母音書記素を音素へ変換する方法、特に連字のそれを音素に変換する方法の習得が、大きく関わっていることを明らかにした。3) 従来の外国語習得の研究では、日本語母語話者に特徴的な CV 分割の文字音韻変換方略は、単純に母語（日本語のローマ字音読）の変換方略の転移として捉えられてきたが、本論文では、日本語母語話者の英単語の文字音韻変換方略における CV 分割変換の補償的な機能を指摘し、CV 分割変換が文字と音韻の変換方法の1つであるだけでなく、日本語母語話者の英語の習得に伴う音読方略の変化のきっかけを与える方法となっている可能性を提示した。

以上の成果は、当該研究領域に一定の学術的貢献をなすものといえる。そのことは、本論文中に記されている研究成果の一部が、我が国の当該研究領域を代表する学会（例えば日本第二言語習得学会（J-SLA））の査読付き学会誌などに複数編受理されていることから確認できる。以上により、本委員会は全員一致して本論文の著者山田恵氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。